奴隷を育てました。

雷刃の襲撃者

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
奴隷を育てました。

【Ｎコード】
Ｎ６１４１Ｋ

【作者名】
雷刃の襲撃者

【あらすじ】
貴族の家に生まれた主人公。
高い身分にあるわけではないが、のんびりとした生活をしていた。
ある日、いつか家業を継ぐための練習用が渡された。
それは始めてみる奴隷。

初日の顔合わせ。

ある日の昼下がり。屋敷の窓からは強い日の光が差し込んでいる。
昼食も終わり、僕は父さんとなんとなく休憩をとっていた。
「こう日が強いとかなわんな」
「雨に降られたりするよりはこのくらいのほうが」
「ふぅ・・・強い日の光に当たると溶けるってしってたか？やはり曇りがいい。すずしいしな。」
いつものごとくふざけている。
「そろそろお前にもいいだろう。」
僕には何がいいのか全くわからない。
「おっ噂をすれば何とやらだ」
小さな女の子が二人、部屋につれてこられた。
普通の女の子と違うところは耳と尻尾がついている。奴隷階級の証だ。
二人に目をやると一人は犬、もう一人は猫の耳と尻尾だ。
二人はワーウルフ、ワーキャットと呼ばれる存在。この種族の者は

主に奴隷として扱われる。

「お前もロヴェーレ家の者なんだからそれなりにしてみろ。家の家業はしっているだろ？」

詳しく知っているわけじゃない。でもどうしても人を使わなければならない仕事だということは知って

いた。それも奴隷とよばれるモノを。

「そのための練習だ。お前もこの者達の用途は分かっているだろ。」

知っている・・・つもりだ。

二人は何も言わず、怯えたような表情でこっちをみてくる。

そんなに見られても僕にだって突然すぎて・・・。

「突然すぎて何をしたらいいか。」

「なら明日にするのか？明後日か？いつまで先延ばしにする？」

いつにしろ同じ・・・ということか。

「この二人をお前に与える。これからどうしようとお前の自由だ。」

やっぱり今すぐには整理がつきそうには無い。

「自分の部屋に連れて行ってそれから詳しく話せばいい。」

言われた通りにしようと思った。おそらくは言われた通りにするのが一番無難だろう。

まだよく分からないんだから。

「と・・・とりあえず僕の部屋に行こうか」

二人は後ろをついてきてくれた。

父さんは状況を楽しむかの様に軽く手を叩きながら見送る。

・・・突然持ってきて楽しんでるじゃないだろうかあのクソ親父。

そう思った。

「ふう。あいつは少し優しいかなら。でも、できてもらわないと困る。」

扉を開け、部屋に入る。

二人は躊躇しながらも、仕方が無いというように扉をくぐった。

部屋に入っても二人は緊張状態だった。

犬の子は明らかにおびえているし、猫の子もかなり警戒しているのがわかる。

二人ともあまりこっちを向こうとはしない。

「えっと・・・」

落ち着いてきちんと二人を見ることができたのは、今が初めてな気がする。

なんというか・・・二人とも可愛らしい。

一人は淡い赤い髪に大きな瞳、垂れた犬の耳と丸い感じもあるせいか人懐っこそうに見える。

もう一人は青い髪に切れの長い瞳が冷たく見えるが、とても整った端正な顔立ちをしている猫の子。

「僕はルル。ロヴェーレ＝ルル。君たちの名前は？」

少しの沈黙の後、猫の子が答えた。

「奴隷に名前なんてあるわけないでしょ。」

・・・。驚いた。それが普通なのだろうか。

今までまったく触れなかった世界。突然訪れたそれに僕の頭の中はかなり混乱していた。

「なら・・・どうしよう・・・・・・。なんて呼べば・・・・いいのかな・・・。」

「別に呼びたいように呼べば。なんて呼ばれようと一緒よ。どうせ今までのだって覚えてなんかないし。」

それだけ言うとまた目をそらしてしまう。

「じゃあ・・・僕が名前をつけていいんだね。」

もう返事をしてくれない。

しかたなく沈黙を肯定ととり

「じゃ君がタマ。で、そっちがポチ。」

またまた沈黙。・・・どうしよう、変な名前にでもしてしまったのだろうか。

「あ・・・・変・・かな。なんて呼んだらいい。・・・好きなのがあれば・・・」

「いいよ、別に。」

「私もそれでいいです。」

片方は本当にどうでもよさそうに、片方は少し嬉しそうに返事をした。

対照的な二人だ。

僕はひとまず安堵し

「・・・どうしていけばいいのか僕にも良く分からないけど。これからよろしくね。」

そう言い頭を撫でようとそっとポチの頭へ手を伸ばす。

「ダメ！そのこに―」

タマがそこまで言ったとき、僕の手に何か衝撃が走った。

見ればポチの口が僕の手を覆っている。噛み付かれたのだ。

歯が食い込み、骨が軋むような音を立てる。

「あ・・・あ・・・・の。」

ポチが手を離した。

「この子は悪くない！しかたないんだよ。反射的に、勝手になってしまうんだよ。」

少し和らいでいたはずのポチの表情が変わっていた。

最初に来たときと比べ物にならないほど怯えている。

初日の顔合わせ。（後書き）

はじめまして。この作品どうでしたか。
初めて「あとがき」というものを書きました。
自分の中での認識ではあとがき＝暴走するためのところ。
もしくは「何をしても許されるところ」だからこそ２００００文字も用意されているのではないかと思います。
エロゲーって高いじゃないですか。１８歳以上対象やし。買えないわけですよ。
となると・・・日ごろの授業中鍛えた妄想力で補うしか無いわけです。
で・・・できたのがこれなんです。

一日目。

「あ・・・。また・・・。ご、・・ごめんなさい。ごめんなさい」
ポチはすがるような瞳で見つめる。
彼女の態度からも、指を噛んだのは意識してやったことではないようだ。
反射的に噛んでしまう。つまりそれは今までの仕打ちのひどさだった。
「ごめんなさい・・・ごめんなさい」
「わざとじゃない！この娘は・・・」
タマはポチを守ろうと僕とポチの間に割ってはいる。
ポチは両手で頭を守るように抑えている。
「おねがいです・・・ぶたないで・・・」
「大丈夫。ぶったりなんかしないから。」
そういってタマを制して、ポチの肩にそっと手を置く。
ポチは体を強張らせるが噛んだりはしない。
落ち着いたころあいをみて、そっと頭を撫でてみる。
こんどは噛まれなかった。
「あ・・・。・・・・え？」
ポチは呆然と僕を見つめ、タマも驚いたように僕を見つめる。
「ちょっと痛いけど、指だって平気だし。」
二人とも怯えたような、警戒するような顔で見つめてくる。
「あっなにか飲み物でももってくるよ。・・・二人ともミルクでいいかな。」
「あの・・・どうして叩かないんですか？」
「・・・？どうして叩かなくちゃいけないの？」
「・・・。」
「それじゃ、ミルク持ってくるから待っててね。」
部屋をでる僕を二人はとても不思議そうな顔で見つめていた。

「・・・」
ホットミルクの入ったカップを置いたが、二人とも飲まずにいた。
「えっと・・・どうしたの。」
「ん・・・」
タマは細目に目をつぶりながらゆっくりとカップの取っ手に手をやった。
「毒見、してみる。」
「だ、大丈夫だって。」
「あんたを・・・信用したわけじゃないんだから。」
香りを鼻で確かめたあと、チロリと舌をだしてミルクをひとなめする。
じっくりと口の中で味を確かめ、ミルク以外の妙な味が無いことを確認できたのか
「こくんこくん・・・ポチ、飲んでも大丈夫っぽいよ。」
「うん・・・」
タマが飲み始めると、続いてポチの飲み始める。
・・・こういうのは猫のタマより犬であるポチのほうが得意分野じゃないのかと思うけど
少し見た目が鈍そうなポチよりタマのほうが感覚は鋭いのかも知れない。
「こくこくこく・・・あっおいしい」
取っ手を使わず両手で包み込むようにして掴むポチ。
片手でティーカップの取っ手をもって飲むタマの仕草に、二人の性格が現れているような気がする。
「すくなくとも今僕は君達になにかし・・・」
僕の声は外から聞こえてきた大きな声にさえぎられてしまった。
扉をきちんと閉めていなかったせいか、たぶん下の階からだと思うけれど豪快な笑い声がここまで聞こえてくる。
「・・・ちょっと見てくるから待ってて。自由にしてていいから。」

階段を一段一段降りていくと、声がはっきりしていく。
「これはこれは、わざわざ足を運んでいただき光栄です。」
「いやいや、気にせんでいい。ただ近くを通りかかったものでな。」
この意味も無く大きい声は・・・この地方の領主のゴロンゾだ。
周囲の評判は良くないし、実際わるい噂もたくさんきく。
だから僕はこの人があまり好きではない。
でも父さんの重要な取引相手であることはしっていた。
だから僕も顔見せ程度に挨拶をしておかないと失礼かもしれない。
僕が広間の入り口に立つとゴロンゾも気がついたらしく
「おぉルル君。おおきくなったな。」
「お久しぶりです。いつも父がお世話になっています」
「いやいや、世話になっているのは私のほうだよ。いや、しかし・・・ん。」
僕を見ていたゴロンゾの視線が、何かに気がついたように僕の背後に移る。
僕もつられるように視線を後ろにやると・・・柱の後ろに隠れていたポチとタマが顔を出していた。
「あ・・・」
確かに自由にしてていいと言ったのは僕だけどさすがにこれはマズイかもしれない。
なぜならゴロンゾの悪い噂の中には女癖の悪さもふくまれているからだ。
「ほほう・・・そんなところにいないでこっちへ来なさい。」
見つかった二人は観念したように柱の影からでてきた。
さっき部屋にいたときよりピリピリした雰囲気が伝わってくる。
二人を撫でながらゴロンゾは笑みを浮かべる。
先ほどの社交的な笑みとは違う、下卑た笑みだ。
体を撫で回される二人は口を硬く閉じて耐えていた。
特にポチは泣き出しそうなくらいに怯えている。

「これは上玉だね。よかったらこの二匹を私に譲ってくれんかね。」
「二匹・・・・」
僕は拳を強く握った。
二匹？いま二匹といったのはこの二人のことなのか？
奴隷を指す言葉として聞いたことが無かったわけではなかった。
どうしてか分からないが、この一言がひどく癪に障った。
少なくともおとなしく従う気にはこれっぽっちもなれなかった。
「あなたにこの子達は渡せません！」
普段の僕では考えられないほど強い物言いだった。
僕は二人の肩を掴んで後ろに隠れるように促す。
「なにを・・・人が優しくしてやったら生意気な。」
ゴロンゾは僕を払いのけようと手を伸ばす。
それを遮ろうと出した僕の手と反発しあった彼の手は僕の口元へと強く振り下ろされた。
口が痛く、そして暖かい。切れた唇から血が出ているのかもしれない。
でもここでひるむわけにはいかない。
「二人は大切な僕の友達です。どうかお引取りください！」
僕は血も拭かずに、ゴロンゾをにらみつけた。
僕の剣幕に押されたのか、ゴロンゾは後ろに後ずさった。
「で・・・では出直すとしよう。」
思い通りにならなかったのが悔しかったのだろうか、捨て台詞を残して
広間を出て行った。
血が出てしまって痛かったけど、それが逆に良かったのかもしれない。
周りには・・・少し迷惑をかけたかもしれない。最初にゴロンゾに応対していた人はソレを追いかけるようにしてでていってしまった。
「もう大丈夫だよ。」
そういって後ろを振り返る。

「根本的には何も解決できなかったけどさ。」
「うぁ・・・」
後ろに下がっていたポチが僕の元へ駆け寄る。
「はは、かっこ悪いところ見せちゃったね」
苦笑いする僕にポチは泣きそうな顔をふるふると横に振り、流れる血を舌でペロペロとなめた。
「くすぐったいよって。」
「そんなこと・・・ないよ。」
後ろからタマがそんなことを言った。
「・・・え？」
「だから・・かっこ悪かったって・・・。・・・かっこよかった。かっこ悪いのは向こうのほう。」
言ってるタマも恥ずかしいのか、顔を赤くして目をそらしている。
「・・・だからポチもあいつ噛むの我慢できた・・でしょ。」
タマの言葉にポチはこくりとうなずく。
もし噛んでいたら彼女自身だけでなく、僕や父さんみんなに迷惑がかかったかもしれない。
それを思って我慢したのなら・・・彼女は少しくらい僕に気を許してくれたのだろうか。
「とりあえずだけど・・・あんたのこと信用してあげる。」
タマの言葉に少しだけ救われたような気がした。
でも本当に大変なのはたぶんこれからだ。
ゴロンゾがかえったのはたまたまかもしれないし、僕の力不足で周りに迷惑をかけたと思う。
けれど彼女達のために何かできたことを素直に嬉しく思った。
それにできるならこれからも彼女達を守りたいと思った。
「悪い魔王からレディを守るなんてよくやったぞ。」
「父さん、いつから」
「最初からだ。あの領主はあまり好きではないからな。出るのを少し躊躇していたんだ。

そこにちょうどルルが出てきてくれたというわけだ。しかし、お前のことは必死に応援していたぞ。心の中で。」

「いたなら助けてよ。」

「本当にまずくなったら助けてやるさ。男は甘やかすばかりでは成長せんからな。」

前言撤回。周りへの迷惑はぼくのせいではなかった。

苦笑する僕の顔を見てポチとタマの二人の顔にもようやく微笑が浮かんだ。

二日目。

コンコンコンコン。
窓を叩く音が聞こえる。
外はまだ暗く、夜が明けていない。
コンコンコンコンコンコンコンコン。
「はいはい。今あけます。」
こんな時間に、しかも窓から訪ねてくる人に心当たりがあった・・・。
そんな人を一人、知っている。
カーテンをめくり、窓を開ける。そこには一人の女性がほうきに乗って宙に浮いていた。
「ハロー」
「ハローじゃないですよ・・・どうしたんですか、こんな時間に。」
「何を言う。これからがワシの時間なのではないか。」
彼女はマリー先生。僕の家庭教師をしてもらっている。彼女は魔女なので空中散歩も年齢を変えるのもお手の物だ。今の先生は２０代後半ぐらいにみえる。格好は黒い魔女っぽい帽子。魔女っぽい服。魔女っぽいマントを着ている。見るからに魔女ということをアピールしているが。本人曰く星の付いた小さな杖を持つと宇宙人にもなれるらしい。時々不思議な発言をする先生だ。
「・・・何をしにきたんですか？」
「ん、そろそろ夜の男女の営みについて教えにな」
「・・・。」
「ついでに領主に逆らってまで守った二人を見にきたのじゃ。」
意地悪そうに微笑みながらそういった。
「そっそれ、どこできいたんですか。」
「ん？水晶で覗き見しとっただけじゃ。」
覗き見だけって・・・。

「この二人がそうか、よく寝ておるわ。」
僕のことは完全に無視し、先生は嬉しそうにそんなことを言った。
「彼女達だって眠りますよ。」
「ほう。なら今までに二人が安心して眠れることがあったと思うか？」
・・・あったのだろうか。最初に来た二人はすごく警戒していたし怯えていた。
ポチは反射的に僕を噛んだ。それは今までの扱いをそのまま現していたとおもう。おそらく今までに安心して眠れたことは無かったんだろう。
「周りの者の意に反して大事に扱っておるようじゃが奴隷を大切にするなど他にはおらんじゃろう。」
「周りの人はやっぱりよく思ってないのかな・・・。」
「いや、そうではないが心配はしておるの。なぜ奴隷を使っておるのか考えてみたか？
――――とまぁワシが問いただしたところでどうにもならん。これはおそらくこれから誰かに問われるだろうからのぅ。誰にも問われずともおそらくは・・・な。」

二人は大切な友達だ、大切にしたい。でも僕は間とても違っているんだろうか。・・・やっぱりよく思ってないんだろうか？
ただわがままなだけに過ぎないんだろうか。あの時父さんは「よくレディを守ったな」って言ってくれたけど、本当はどうなんだろう・・・。

朝の窓から差し込む日の光というものは朝起きたとき、清々しいものだ。
が、まだ眠い場合それは鬱陶しいことこの上ない。

今回は後者だ・・・。
窓から差し込む眩しい光。もっと寝かしておいてほしいのに寝かせてくれない。強い光がそれをさえぎるのだ。
ベットにすわり、起きるのもしんどく、カーテンを閉めるのもだるい・・・。
動こうとは思うものの動かない状態でいた。
「おはようございます、ご主人様。」
「ったく、いつまで寝てんのよ。」
居ることに気がつかなかったがポチとタマはベットのすぐ横に立っていた。
「お～そ～い。どれだけ待たされるのよ。」
「ごめんね。ずっとそこで待っていてくれたの？」
「ついさっきからです。タマちゃんね～、さっきまで起きられなくて大変だったんですよ。」
「ポチ、あんたうるさい。」
「うぅ・・・」
「・・・ほら、朝食いくよ。早く食べ行かないの。」
「いきますっ！」
少し僕は安心した。・・・いやほんとに、泣かなくてよかった。

朝食が終わり、お楽しみへと向かった。
ゴロンゾが帰った後、「探検」と屋敷の中を回った。
だいたい見て周りこれが最後の中庭。二人ともが楽しみにしていた。
だからお楽しみ。
ポチは本当に楽しみだったみたいだ。喜んで庭を駆け回っている。
・・・犬だからかな。
タマは・・・ポチとは反対側に居たと思ったけど姿が見えない。
座ったまま首だけ動かして探す。
ぽかぽかしていて気持ちがいいし、正直このままのんびりしていたい。

なにも考えずのんびりと、何が正しいのかも気にせず。
ただのんびりと時が過ぎていくのを楽しんでいたい気分だった。
不意に目の前を白いモノがひらひらと通り過ぎた。
そして、何か黒く大きいものが視界に飛び込んできた。
それは僕の顔に強烈な二連撃を与え、目の前に降り立った。タマだ。
おそらくは2度蹴り。方向転換用。壁代わりに、蹴飛ばされた。
タマはうつぶせになり、猫のポーズ。
両手を前に出し、体を引き狙いをつける。尻尾は楽しそうに振っている。
その先には白いチョウ。おそらくは目の前に飛び込んできた白いモノ。
タマはあれを追いかけていたのだと思う。体がうずいている、顔もなんだか猫っぽい。
猫じゃらしに反応する猫みたいに右手をすばやく突き出す。
・・・あっ逃げられた。
これもポチと同じ反射・・・なのかな。痛む鼻をさすりながらそんなことを考える。
こうしてみると本当に二人は普通のペット・・・女の子と変わりない。
二人とも存分に楽しんでいるようで、見ているとこっちも楽しくなる。
・・・だんだん二人もなれてきたかな。

三日目。

「ご主人様・・。」
「ん・・・。」
もう少し眠っていたい気分なのだけれど・・・
「ご主人様、朝ですよ。」
「・・・・・ぅ・・うん。」
どうやら狸寝入りを決め込むわけにもいかなようだ。
仕方なく眠い目を擦りながらまぶたをうっすら開けると、メイド服を着た金髪の女性が僕を覗き込むように見つめて、微笑んでいた。
「・・・戻ってたのか・・・おかえり、メアリー」
その言葉に彼女は顔を上げながら一歩下がり、丁寧に頭を下げた。
「はい、ただいま戻りました。おはようございますご主人様。」
「うん、おはよ。」
彼女の名前はメアリーといい、この屋敷のメイド長として働いてもらっている。
僕の幼いころから面倒を見てくれていて、僕にとっては母親代わりとも言える人だ。
身の回りの世話全般をいつも嫌な顔一つせずやってくれて、悩みのあるときは相談なんかにも乗ってもらったりする。
姉のような存在でもあり、主従関係にもある・・・不思議な関係の人だ。
「今日もよいお天気になりそうですよ。」
タンスから出した着替えが布団の上へとおかれる。
「今日も暖かくて気持ちいね。」
いつも床に就くのは、僕よりも遅いはずなのに・・・
それでもいつも確実に僕より先に目覚めて起こしてくれる。
おかげで、僕の一日は彼女の一言から始まることが多い。
「帰ってきたばかりで疲れてるんじゃない？もう少し休んでてもい

いのに。」
「いいえ、昨夜のうちに夜行列車で戻りましたので仕事に支障はありません。
それよりも・・・お屋敷を留守にして申し訳ありませんでした。」
「もう少しゆっくりしてきてもいいのに。」
「いいえ、そんなわけにも行きませんわ。私の我侭でとらせて頂いたのですから」
メアリーは微笑みながらポチとタマがいたであろうベッドの乱れたシーツと布団を器用に整えている。
「せっかく久しぶりにお母さんに・・・」
「ふふ・・・お互いに元気なのが確認できれば十分ですよ。親孝行の一つもできましたし。」
「でも夜遅くに帰ってきて、大変だったんじゃないの？」
「いつもとあまり変わりませんわ。それにご主人様、私が起こさないとなかなか自分では起きないじゃないですか。」
うぅ、そういわれると・・・。たしかに・・・。
「・・・でも、そんなに若くないんだから無茶しちゃダメだよ。」
「ホホホ、侮られては困りますわ。ホホホ・・・って朝から言って下さいますわね。」
メアリーが顔に引きつった笑みを浮かべていると、開いた扉の向こうから階段を上る音が聞こえる。
明らかに走ってると思われるその音は、正直うるさい。
こんな音を立てて走るのはこの屋敷に二人しかいない。
「いったいなんだ。朝からどたどた騒がしい。」
「う～る～さ～い！さっきまで寝てたくせに。こっちは早起きしてたんだよーっ！」
「あら、二人ともどうなさいました。」
「メ・・・メアリーさん。お鍋、ブクブク」
「火弱めようと思ったら余計えらいことになったんだけど」
「うんっうんっ。あの、取っ手をひねったら火がですね、ボーっと」

「あらら、大変。取っ手を逆にひねっちゃうと強くなるんですよ。すぐ行きますわね。」
・・・二人ともだいぶ屋敷の生活にもなれたみたいだった。
メアリーとも自然に・・・。
・・・？
メアリーと会ったのは今朝のはず。間違いなく今日が初めてのはず。なのに自然に接している。この朝の短い時間の間にもう二人と打ち解けてるなんて。
・・・ちょっと凄い。
「さすがメアリー、仕事が速いね。」
「はい？」
「ううん、なんでもな。」
「ほらほら、ご主人様も早く起きてくださいませ。朝食の準備も済みます。」
「あ、ごめん。すぐ行くから」
「はーやーく！もうだめ！」
「お鍋～お鍋～。燃えちゃいますぅぅ～」
「はいはい、今すぐに。」
遠ざかっていく三人の足音に少し苦笑しながら、僕は両手を振り上げ、背筋を伸ばす。
「ここもずいぶん騒がしくなってきたな。」

石造りの部屋のせいか、扉をくぐり中に入るとひんやりした空気が体を包む。
食料を保存しているし、毎日火を使っているからこのぐらいの方がちょうどいい。
一人でそんなことを思いながら、台所から響く奇妙な音の発信源へと引かれる。

朝食はさっき食べ終わった。
が、奥のほうには何か動く影が見える。まさか泥棒ではあるまい。
そう思いながらも少し警戒してゆっくり近づく。
「あ・・・」
近づくにつれてその正体が何なのか大体解ってきた。
なぜならその影は頭から大きな三角が飛び出していたから。
食料を貯蔵している棚の戸が開けられてて、そこに彼女は丸くなっている。
「やっぱりタマか」
「ニャァッ！！？」
僕が声をかけるとタマは声を上げながら、びくっと体を震わせた。
僕には気づいていなかったらしく、毛を逆立てて驚いた。
別に驚かせようとやったのではないが、かなり驚かせてしまったらしい。
「ごめんごめ・・・タマ？それ。」
手には齧ったような歯型のあるソーセージが握られている。
そうか、つまみ食いしてたのか。
お昼が終わったばっかりなのに、細身の体に似合わず意外と食欲があるのかもしれない。
「その、手に持ってるの何。」
「う・・・。」
手には証拠となるソーセージが強く握られている。
あわてて手を後ろに回して隠そうとするが見てしまった以上あまり意味を成さない。
「つまみ食い・・・してたんだ」
「なによ、・・・怒るの？・・・いいよ怒っても。」
タマは悪びれることなく、ふてぶてしく僕をにらみつけるばかりだ。
「怒る？どおして？」
「どうしてって、勝手に台所漁っていろいろ食べたんだよ。」
「別に怒らないよ、食べたいときは好きなだけ食べて。」

「はぁ？・・・本気？」
「うん、本気だよ。でもせっかくメアリーがおいしい料理作ってくれたんだから、今度は遠慮せずに食べたらいいのに。」
「・・・。」
「それとも口に合わなかった？」
「そ、そんなこと無いけど・・・・。」
「じゃ、問題ないね。」
「う・・うん。」
「それでもおなかがすいてたら、少しくらいつまみ食いしてもいいからさ。」
「う・・・」
「それにそのソーセージって油が多いから、軽く炙ってからのほうがそのまま食べるよりおいしいんだよ。」
「・・・。」
「やってみる？」
タマは僕の顔を怪訝そうに見つめている。
それは疑うような・・・というより何かへんなものでも見るような目つきだ。
そんな風に見られてもどうしたらいいかわからないって。
「・・・。」
しばらくの間台所に沈黙が流れる。
「えー・・・と、なに？顔に何か付いてる？」
先に口を開いたのは先に我慢ができなくなった僕のほう。
「あんた、」
「ん？」
「あんた、やっぱり変なやつ。」
手に持ったソーセージを口に詰め込んで、口をモゴモゴ動かしながらタマは台所から去っていった。
僕は変なのか？変なのはお互い様だと思う。
むしろ変なのはタマだと思う。

開けっ放しの棚の扉を閉めて僕も台所を後にした。

夜もふけて、僕とポチとタマの三人はパジャマに着替えた。
窓を開けると外はすっかり夜の静寂に包まれていた。
遠くに少し明かりが見えるものの、街全体が静まり返っていた。
「ふぅ、さすがに夜は冷えるなぁ。昼間は暖かかったんだけど。」
「そうですね～お昼はぽかぽかしてて、お昼ねが気持ちよかったですよ。」
「そうだね、庭で寝転がっていると気持ちいいかもしれない。」
「はいです。今日はちょっと芝生の上でお昼寝しそうになりましたよ～。」
「ポチは外に出てたもんね。」
「はい、メアリーさんと一緒にいたりなんかしてました～。」
「さーむーい。窓閉めて。」
「あ、ごめん空気の入れ替えにと思ったんだけど開けすぎたかな。」
タマの言葉に僕は窓を閉めた。
カーテンも閉めると外から漂っていた寂しさも消えていく。
「もう遅いし、そろそろ寝ようか。」
「はいです。ご主人様。」
「タマちゃんも、もうおねむするぅ～？」
「べつにあんたに言われなくても眠くなったら寝るわよ。」
「はうぅ～～～。そ、そうだよね・・・・・。」
「ふん。」
人懐っこいポチとは対照にタマは僕をちらりと睨むように一瞥すると、そのまま何も言わず布団に入ってしまった。
「えーと、あの・・・その・・・。」
ポチはその場を取り繕おうと、僕とタマを何度も見つめる。
「タマちゃん、まだ・・・慣れてないだけで・・・・・あのっ、

本当は、タマちゃんだって」
「あー！ポチうるさいっ！眠れない！」
ポチの声をさえぎるようにタマが声を張り上げる。
「あうぅぅぅ、ご、ごめんなさい。」
すっかり萎縮してしまったポチは大きな目いっぱいに涙をためて追い縋るようにたまのせなかをさする。
これはちょっとポチがかわいそうだ。
「もう、触らないでよ！」
「だって～タマちゃん怒るんだもん・・・」
「ったく！怒ってないから！」
「やっぱり怒ってるぅ・・・」
僕は今にも泣き出しそうなポチの頭をそっとなでる。
ポチは目にたまった涙をぬぐうと微笑んだ。
「ポチ、もう寝ちゃお。」
「は・・はい。
「おやすみ。」
「はい、おやすみなさいですぅ。」
「タマもおやすみ。また明日。」
「・・・。」
タマは何も答えず、耳が少し震えるように動いただけだった。
明かりを消すと目が慣れるまでの間、本当に真っ暗になる。
数分も経たないうちに、すうすうと寝息が聞こえる。
「ポチは本当に寝付くのが早いな・・・」
僕は眠れずにしばらく上を眺めていた。
と、ポチの向こうからがさごそと布のかすれるとがした。
それは、タマがこっちを向いた、そんな気がした。
僕は首を向けてそっちを見る。
目を凝らすと、そこには三角の耳とタマの後頭部が見えただけだった。

四日目。

部屋は窓から差し込む朝日の光によって、もう夜が明けたことを知らせていた。
開け放たれたカーテンから、ベッドまで直射日光の柱が伸びて、それが僕の顔を照らす。
「ん・・・」
ぎゅっと目を閉じてみるが
「・・・眩しい。もう起きろってことか・・・」
ゆっくりと体を起こし、まだ眠い目を擦ると、横に耳のついた二人の人影が見えた。
「わっ」
・・・まさかそんなところに立っているとは思わなかった。声まで上げて自分でも少しかっこ悪いと思う・・・・もう少し気を強く持とう・・・。
「・・・もう二人ともおきてたのか。」
見ればもうパジャマでなく、普段着に着替えていた。
もしかするとずいぶん前に起きて、僕の寝ているところを観察でもしてたのだろうか？
・・・おかしな寝言や妙な寝顔にはなってなかったと思うけど・・・。なぜか不安だ。
「おはようございますご主人様。今日も一日よろしくお願いしますですよ。」
「おはよう。・・・ひょっとしてずっと立ってたの？」
「あ、はい。でも、ずっとという程でもありませんけど。・・・どのくらいだっけ、タマちゃん？」
「・・・しらない。」
タマは聞こえるか聞こえないかぐらいの小さな声で無愛想に答えた。
とにかく、二人はずっとそばに立っていたらしい。

「僕、変な顔してなかったよね？」
「あっ、それなら大丈夫ですよぉ。それにご主人様の寝顔って結構・・・」
「結構・・・？」
「あっ、いえ、えへへ・・。なんでもないですよ。」
ん～なんだかよく分からないけど気になることを言ってくれる・・・。
って言うか恐くてこれ以上聞く気にならないんだけど・・・
「まぁ・・・観察してもそんなに面白いものじゃないから・・・。」
「そんなことないですよ。」
・・・。結構・・・どうたったのだろう。
「おはよう、タマ。」
僕はタマに2度目の挨拶をした。
彼女はさっきからずっと不機嫌そうな顔をして立っているだけだ。
「・・・。」
「ほら、タマちゃんっ」
タマは一瞬ポチを一瞥するように睨み、そのままソッポを向いて、部屋を出て行ってしまった。
「タ、タマちゃ～ん。」
相変わらず無愛想なタマの態度に、まだおきたばかりだというのにポチは既に泣きそうな顔をしている。
「もうっ、タマちゃん。す、すみませんご主人様」
「大丈夫。気にして無いよ。」
「は、はい。」
タマを追いかけるように、ポチも部屋を出て行ってしまった。
「そう簡単には打ち解けてくれないのかな・・・。」
僕は再びベッドの寝転んで天井を眺めた。
「ん・・・。」
でも・・・起きたときタマがいたってことは、ずっとポチと一緒に居てくれたってことだよな・・・。

起きてすぐ部屋の外に出れたはずなのに・・・。
「嫌われてるけど・・・すぐに出て行かなかった分、大嫌いというわけでもない・・・・のかな。」
このまま寝てたらまたメアリーが起こしに来るかな。
僕はゆっくり起き上がり、部屋を後にした。

昼食も終わり、僕は庭へでた。
芝生が同じ高さに切りそろえられた庭は、歩くたびに靴を心地よく受け止める。
決して広くは無いが、だからこそ細かなところまで手入れがいきわたってるといえる。
「今日もあったかいや。」
日差しはそこまできつくない。ぽかぽかと気持ちがいい。
庭の隅に取り付けられた簡素な物干し台では、ちょうどメアリーが洗濯物を干しているところだ。
「ん・・・？もう一人いる？」
良く見ればもうメアリーと一人、干したシーツの向こうでもぞもぞと動く人影がある。
「ポチ・・・かな？」
太陽に照らされた純白のシーツに透き通る小柄な影は、姿こそ見えなくとも間違いなくタマだ。
僕はゆっくりそのシーツへ近づいていった。
「あら、まぁ・・・」
先にメアリーが僕に気がついて微笑みかけるが、タマは相変わらずシーツの向こうでもぞもぞと動くばかりだ。
「うんしょ、うんしょ。」
「ポチ？」
どうもシーツ干し方が上手くいってないようだ。

眉間にしわを寄せて、難しい顔をしながらシーツをぺたぺたと触っている。
「うんしょ・・・シワの無いように・・・と。」
シワを伸ばせばまた別のところにシワができてしまい、なかなか上手く干せない。
「ポチ～？」
「う～・・・難しいです。」
「ポチってば」
話しかけても目の前のことに夢中で全く気づく気配が無い様子のポチに僕はそっと肩に手を置いた。
すると
「！！！はうわっ！！！！」
さすがに気がついたものの、ポチは悲鳴にも近い声を上げた。
「あ・・・あれ？ご主人様？びっくりしました・・・。」
「ご、ごめん。別に驚かせるつもりは無かったんだけど。」
「あ・・その、私のほうこそ驚いてしまって・・・あ・・・あれ？あぁぁぁ！またシ、シワが。」
驚いた拍子に物干しにかかったシーツを大きく動かしてしまった。くしゃくしゃになったシーツを前に一瞬は呆然としていたものの、すぐにシーツに手を伸ばす
「あ、ごめん。・・・・手伝おうか？」
「いえいえいえ、大丈夫です。」
あたふたとシーツを直す手つきは流石にメアリーに比べるとたどたどしい。
「でもどうしてシーツを干すのを手伝ってるの？」
「はいっ、お世話になっているので少しでもお役に立たないと！」
僕の問いにポチは微笑みながら答えた。
「そんなに気を使わなくても・・・」
「そんなわけにはいきませんよぉ・・・・ご飯だって食べさせていただいてるんですから。」

僕は別に無理やり彼女に家事をさせようとは思っていない。
けれど、ポチが率先してやりたいというのだから、それをとめたら逆に失礼だ。
むしろそうやって何かを覚えていくうちに、やりたいことでも見つけてくれたら、僕だってうれしい。
「でも苦戦してるみたいだね。」
「はいですぅ・・・見ているだけだと簡単そうなんですけど・・・それがなかなか・・・。」
「ふふ、一朝一夕にはなかなか身につかないものですよ。ゆっくり、ゆっくりですよ。」
「メアリーはもう熟練してるものなぁ」
「殆ど毎日やっていますからね。ご主人様の下着の種類や枚数だって頭に入ってますわ。たとえば今は居ているものは・・・。」
どうしてそっちへ話が進むのかわからないが、おかしな方向へと話題が進んでいるようだ。
「ちょ、ちょっと・・・。」
言葉をさえぎるように手を振って慌てる僕を見てメアリーはやさしく笑う。
「ふふふ、冗談ですよ。」
ポチはというとシーツをつかんだまま手を止めてメアリーの話に聞き入っている。
そして、好奇心に輝く瞳を僕とメアリーのほうへ行ったりきたりさせている。
「知りたい？」
「はい！」
「別に普通だってば！」
「だ、そうです。」
「え～」
ポチは少しがっかりしたようなこえを上げながら、微笑んでいる。
「ま、まぁメアリーならこういう仕事も教えるの上手いだろうし、

任せても大丈夫かな？」
「はい。きちんとやろうとする心があれば大丈夫ですわ。ポチさんは少し不器用ですけど綺麗にしたいという気持ちはきちんとこのシーツにも現れていますわ。」
少し間があって、
「お洗濯だけに。」
「・・・」
メアリーのいっていることの意味が分からなかった。
が、すぐに理解できた僕は言葉を失った。
「え、え？どうしたんですか？」
「あ・・・いや。何て言ったらいいんだろう。」
この場を流してあげるのも・・・やさしさかな？
「さ、ささポチさん。残りもやってしまいましょう。」
「え。は、はいっ！」
ポチの直したシーツは流石にメアリーと比べると上手ではないが、直向な気持ちは現れているような気がした。
「無理しないで、気をつけてね。」
「はいっ、大丈夫です。」
ポチの笑顔は、僕のほうも嬉しくなってしまます。まだ少し他人行儀名ところはあるけれど、本当はやさしい見た目通りの子なんだろう。初めて会ったときより、ずいぶんやわらかくなった気がする。
二人に手を振って僕は庭を後にした。

四日目。（後書き）

やっとです・・・。はい。

五日目。

朝なのと、石作りということもあって台所は少しひんやりとしている。
テーブルの上に朝食が並べられると、ポチとタマは難しい顔をしてそれを見つめる。
メニューはパン、サラダ、ベーコンエッグ、コーンスープ。
僕にとってはごく普通に朝食なんだけど・・・。
「はぅぅ～・・・。」
「むぅぅ・・・。」
「食べ物とにらめっこしてないで・・・。早く食べないとメアリーがせっかく作ってくれたんだから冷める前に。」
「は・・・はい。」
「ほらほら、いただきまーす。」
「いただきますぅ・・・」
ポチはまずスプーンを握って、スープをすくおうと皿に近づける。
だがどうしても上手くいかないらしく、皿とスプーンが何度もぶつかり、カチカチと音を立ててしまう。
「ポチうるさい。」
「だ、だって～・・・う、うぅぅ・・・だ、だめです～」
ポチはカチカチと音をたてるスプーンをおいて、皿から直接スープをすすり始めた。
「もう、お行儀がわるいぞ。」
「で、でも・・・」
「スプーンはこうやって持ってさ・・・。ほら簡単でしょ？」
僕はポチに見せるよスプーンを握って、スープを口に運んだ。
「み、見てると簡単だって思うんですけど・・・やってみるとなかなか・・・・。」
「どうしても嫌なら仕方が無いけど、これから使えたほうが便利だ

よ。使わなくちゃいけないことも何度もあるだろうから。」
今まで食器もまともに使わせてもらえなかったという事実を攻めるような真似をするのは、二人のせいではないだけに胸が痛い。
でもこれからはスプーンやフォーク、ナイフを使えるようになることも必要なんだと・・・僕は思う。
「は、はいですぅ～・・・・」
ポチは再びスプーンを握ってスープをすくおうと皿に近づける。
「大丈夫、毎日使っていればすぐに慣れるから。」
「そうですよ。ご主人様だって昔はナイフとフォークを・・・くすくす。」
「メアリー、僕の話はいいって！」
「うぅ・・・ムズカシイです・・・。」
どうしても皿とスプーンをぶつけてしまう。こればかりは慣れなのかな・・。
「ほら、タマも・・・ね？」
見ればタマはスプーンスープの入った皿を見つめて固まっているではないか。
「わ・・・わかったわよ。ポチなんかとは違うところ見せてあげるわ。」
意を決したのかタマはスプーンを持ち上げる。
「くう・・・む？・・・・むう・・・・」
どう握ったらいいのか解らないのか、手の上で何度も握りなおす。
「うううぅ、なんなのさこれー！」
不意にカランとスプーンがタマの手から抜け落ちた。
タマの手はまるで猫のように握られていて可愛らしい。
「あはは」
「むかーっ」
僕の笑い声に怒ってしまったらしい。
タマはふて腐れた顔で料理を手掴みでとり、平らげていく。
「むぐむぐ、もぐもぐ。」

スープも手にとって一気に飲み干した。もうかなりさめていたらしく、猫舌でも大丈夫なようだ。
「おいおい・・・」
「タ、タマちゃ～ん」
「ごちそーさま！タマはそれ使ったゆっくり冷えたものでも食べてなさい！」
タマは立ち上がって乱暴にイスを押しのけると、そのまま出て行ってしまった。
「やれやれ・・・。」
「大丈夫、少しづつ、少しづつですから。」
静かになった食堂にポチのならすカチカチという音だけが響いた。

五日目。　？

僕が目を開けると外はまだ冷たく、カーテンの隙間から月明かりがさしていた。
「ふぅ・・・まだ朝じゃないのか。なんか変な時間におきちゃったな・・・。」
今日はなぜか睡眠の途中に目覚めてしまったようだ。
「二人はぐっすり眠ってるのかな？」
頭を横にして二人の眠るベッドを見る。
「・・・・・あれ？」
二人ともそこには居ない。
あるのは、はぐられた布団だけ。
「えええ・・？」
僕は上半身を起こし、眠い目をさすりながらもう一度二人の眠っているはずのベッドを見つめた。
「あれれ・・・・・？なんでいないんだろう？？」
ベッドから立ち上がり、ポチとタマのベッドを触ってみる。まだほのかに暖かい。
「居なくなってからあまり時間がたってないのかな？まぁ・・・待ってればそのうちすぐ帰ってくるかな。」
僕は再びベッドに戻り目を閉じた。
・・・。
・・・・・・。
「うう・・・。」
・・・・。
数分待ってみたけど・・・戻ってくる様子は無い。
「トイレならもう戻ってきてもいい時間だし・・・心配だな。」
トイレならば、夜が恐いからどちらかが片方を起こして一緒に行く・・・なんて可愛い想像もできるが、それにしても遅い。

と、しばらく考えてみても戻ってくる様子も無い。
「・・・よし、行くか。」
気になって眠れず、僕はベッドから起きた。
ドアは少し開いていて、ノブを回さずとも扉が開いた。
廊下を一歩踏み出すと、少し肌寒い空気が全身を包む。
なにか羽織るものでもあったほうがよかったかなと思いながら進む。
すると廊下の向こうからかすかに話し声が聞こえてきた。
「うん・・・？女の子の声・・・ポチとタマかな？」
話し声のようだから最低二人はいるのだろう。
近づいていくに連れて会話が徐々に言葉として聞こえてくる。
「この先・・・かな。」
廊下の曲がり角で少し止まり、そこから顔を出して向こうを見てみる。
「いた。」
小さな子が二人。シルエットからするにポチとタマで間違いは無いだろう。
「なんだろう・・・こんな夜遅くに二人で。」
二人の会話に耳を傾けてみる。
「・・・・タマちゃん・・・・」
「何度も・・・・」
「ご主人様は優しい人だよ・・・・だから・・・・今までの人とはぜんぜん違って・・・・。」
「・・・・。」
「だから・・・・今度、だけ・・・・もう一度だけ・・・・」
「・・・・・。」
「信じて・・・・みようって・・・・」
「そんなの・・・・」
「・・・・うん。」
「・・・・いわれなくても・・・・・でも・・・・」
ポチの声は大体わかるものの、ボソボソと喋るタマの声はよく聞き

取れない。
なんだろう・・・？タマの言葉からするに僕のことを話しているんだろうけど。
・・・。
「・・ん。」
きっと僕の前では話せない。だからこんな夜遅くに二人で抜け出して話しているのだろう。
それはそうだ。ここに来る前だって多分二人は一緒だったと思うから、二人でしか話せないこともあるはずだ。
「なら、僕がこれ以上盗み聞きするのはよくないかな。」
僕は二人の会話が終わるのを待たずに部屋に戻った。
盗み聞きはよくない。解っているものの、聞いてしまった以上それが頭に残って離れない。
「ポチは・・・好いてくれているみたいだけど、タマには・・・嫌われてるのかな。」
断片的にしか聞こえなかったから分からない。聞こえた分だかでは、あまり好意的には聞こえなかったかも・・・。
でも一週間もたたずに信用してもらえるなんてことは無かったんだろう。
今までのことがあったんだ。
それは最初に分かってたし、一緒に生活していていろんなことに気がついた。
案外、そういう人だけが傷つくような言葉を言っていたかもしれない・・・。
「仲良くなるにはまだまだ時間をかけないとダメかな・・・。」
しばらく考えてるうちにまた睡魔が襲ってきた。
「おやすみ、二人とも。」
僕は誰もいないベッドへ話しかけ、来るのを待つことなく眠ってしまった。

五日目。　？（後書き）

五日目の続きの話です。
なんか上手くいかなくて、結局二つに分ける形になってしまいました。
変な感じですいません。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6141k/

奴隷を育てました。

2011年11月13日11時46分発行